

日本近代化論と『万延元年のフットボール』 — 異なる「明治」を構成する「民衆」へのまなざし —

北 山 敏 秀

はじめに

1960年8月に開催された「箱根会議」を契機として、アメリカの日本研究者を中心に「日本近代化論」が展開されていく。それは、日本を西洋以外で唯一「近代化」に成功した国として捉えながら、日本の軍国主義的側面を偶発的な逸脱として位置づけ、あらゆる社会環境の変化を直線的な歴史の発展として肯定的に説明する議論である。この日本近代化論と同時進行的に、日本政府は、1968年に向けて「明治百年」を祝賀する計画を進めていく。この計画によって日本政府は、「明治」を、高度経済成長に繋がる近代国家としての発展の起点として位置づけていった。

大江健三郎の長篇小説『万延元年のフットボール』（『群像』1967年1～7月号）が発表されたのは、ちょうどこの「明治百年」記念の計画が進められていた1967年のことである。『万延元年のフットボール』は、60年安保直後を物語の現在としながら、「万延元年」（1860年）の「一揆」に関わった「曾祖父の弟」をめぐる、複数の見解を対立させながら展開される登場人物たちによる真相の追求が物語のひとつの軸を作る。それによってこの物語は、舞台を「四国」の「谷間の村」という周縁に置きながら、その土地に生きた「民衆」の歴史に想像力を向ける人々を描き出した。

大江自身はこの小説を、「安保体制下の強権の文化政策の基本方針として採用された、「明治百年」の宣伝に個人的に抵抗すべく」始めた、「明治についての一連のささやかな読書計画」の、「小説のかたち」での「途

中経過報告としての一応の結論」として位置づけている⁽¹⁾。実際のところ大江は、その他のエッセイなどでも、政府による「明治百年」記念の動きに対し、それぞれの生活の場で明治維新の基盤を作ったはずの多様な「明治の民衆」の姿を省みることのない、上からの「一方的記憶」を与える行為としてこれを批判していた⁽²⁾(後述)。その点で、1860年と1960年という「百年」の歴史を繋ぎながら「民衆」のあり方に想像力を向ける『万延元年のフットボール』は、確かに、政府によって計画が進められた「明治百年」記念に対する批評行為としての意味を持つと考えることができる。

本論文は、以上のことを念頭に置きながら、1968年に向けて「明治百年」が盛り上がりを見せる政治的状況のなかで、大江がそれを批判する立場から、『万延元年のフットボール』や周辺のエッセイなどを通し、どのような言説を紡いでいたのかを検討するものである。

まずは、政府による「明治百年」記念の計画が持つ意味を明らかにするために、その理論的支えになったと考えることができる日本近代化論の概要を記述する。

1、「日本近代化論」の歴史観

1960年8月29日から9月2日にかけて、いわゆる「箱根会議」が開かれた。この会議は、アメリカのアジア学会(Association for Asian Studies)に付属する近代日本研究会議(The Conference on Modern Japan)の呼びかけにより、アメリカと日本の研究者を中心として30名余りが集まって開かれたものだ。この箱根会議は、1962年1月にバミューダ島で開催された近代日本研究会議の第1回会合の準備のための予備会議にあたる。1968年に日本語版が刊行された近代日本研究会議の研究成果報告のなかで、箱根会議は、「概念としての近代化を定義し、またこれを日本の場合に適用するのに伴う概念上の諸問題を(時には不一致点をいくつかきわ立たせることによって)、明らかにするのに役立った」⁽³⁾と位置づけられている。1960年8月末のこの箱根会議を契機

(1) 大江健三郎「第五部のためのノート」(大江健三郎『持続する志 全エッセイ集』文藝春秋、1968年10月、451頁)。

(2) 大江健三郎「記憶と想像力」(『展望』1966年10月号)。前掲、大江『持続する志』所収。

(3) マリウス・B・ジャンセン編『日本における近代化の問題』(細谷千博編訳、岩波書店、

として、アメリカの研究者を中心に、日本研究の場に「近代化」という概念が盛んに持ちこまれていくことになる。

まず以下では、箱根会議にも参加し、1961年より駐日アメリカ大使を務めたエドウィン・O・ライシャワーの議論を参照しながら日本近代化論の概要を記述する。

ライシャワーは、日本を「高度に近代化したただ一つの非西洋国家」として位置づけ、さらに、「現在近代化を図っているほかの非西洋諸国にとって」、「日本の近代史は」「成功と失敗の例を兼ね備えた絶好の「教科書」となるべき」だと述べた⁽⁴⁾。

その際、「近代化」の指標として重視されるのは、「工業化」といった技術的な側面での社会変革である。中村雄二郎との対談で、中村が「オブジェクティブ（客観的な）近代化論とサブジェクティブ（主體的な）近代化論という区別」を行なったことに対し、ライシャワーは、その区別には「価値判断」が含まれているとして受け付けず、自身らによる「近代化」についての議論は、「モダナイゼーションということ自体をいつているわけで、いいか悪いかは別問題」だと主張する⁽⁵⁾。この点において、「物質的生活手段が工業化されて便利になる」こと（先の区別で言う「オブジェクティブ」な近代化）に加えて、「人間が自分たちの生活を自己組織してゆく」こと（「サブジェクティブ」な近代化）としての「デモクラシー」を、「近代化」の「もう一つ」の要素として重視する中村との対立点が生じる。ライシャワーは「民主主義」と「近代化」の関係について次のように述べる。

近代化の言葉の定義のなかに、民主主義を入れるべきではないと思う。[中略]世界の近代化されているいろんな地域を見渡すと、必ずしも民主主義がそれに伴っているとはいえない。たとえばナチス・ドイツなどは、工業技術的には非常に進歩していた、近代化された国だったけれども、民主主義の国家ではなかった。⁽⁶⁾

さらにライシャワーは、中村が「ナチス・ドイツはだからほんとうの

1968年7月、3頁。原著は1965年の刊行）。なお、丸括弧内の但書は原文のママ。

(4) エドウィン・O・ライシャワー『日本近代の新しい見方』（講談社現代新書、1965年10月、34～35頁）。

(5) 中村雄二郎・エドウィン・O・ライシャワー「[△]近代化。をどう見るか」（『現代の眼』1964年5月号）。

(6) 前掲、中村・ライシャワー「[△]近代化。をどう見るか」。

意味で、近代化したのではないといわれている」(強調原文)と指摘したのに対し、「全体主義制度」は「近代化」の「非常に不幸な副産物」だと補足しつつも、「たとえば全体主義制度をも含めて、近代化というふうに考えている」と続けている⁽⁷⁾。

この議論が、「一九三〇年代から第二次世界大戦中に見られた日本の軍国主義」に対する、ライシャワーによる次のような評価にも繋がってくる。

わたしが強調しておきたいことは、要するに、日本も近代化が進むにつれて、ドイツやイタリアなどの西洋諸国と同じように、民主主義をとるか、さもないと全体主義をとるか、という選択を迫られるにいたったということです。これは、新興諸国の指導者たちが、十分、心してかかるべき点です。⁽⁸⁾

ここで「全体主義」は、かつての枢軸国を例に挙げながら、決して「近代化」という概念と相容れないものではなく、「近代化」の過程でどの国もが陥る恐れのあるアクシデントとして位置づけられている。ここに、「明治以後の日本」においては「個人生活から何もかも全部、ある意味では国家生活のなかに吸収されてしまった」⁽⁹⁾ということを意識しながら、「民主主義」を「サブジェクティブ(主體的な)近代化論」の立場から重視する、先の中村との対立点が生じることになる。

こうした、日本近代化論における、日本における軍国主義の興隆という論点の座りの悪さは、ひとりライシャワーの議論だけに見られるものではない。1968年1月に開催された近代日本研究会議の第6回セミナーを主催したジェームズ・W・モーリは、第5回までの会議を振り返りながら、「一九二〇年代と三〇年代に対する検討がなされたときには、順調な議論の進行はしばしば乱れ」、「この時代の何かがうまくゆかなかったことを誰もが認めた」と伝えている⁽¹⁰⁾。

このように、日本近代化論は、軍国主義を含むあらゆる状況を直線的な歴史の発展のなかで現れたものとして説明し、日本の近代における資

(7) 前掲、中村・ライシャワー「近代化。をどう見るか」。

(8) 前掲、ライシャワー『日本近代の新しい見方』(40頁)。

(9) 前掲、中村・ライシャワー「近代化。をどう見るか」。

(10) ジェームズ・W・モーリ「序説——日本の選択とその結末」(ジェームズ・W・モーリ編『日本近代化のジレンマ』岡本幸治・小平修監訳、ミネルヴァ書房、1974年7月、8頁。原著は1971年の刊行)。

本主義的發展を称揚することに注力したのである。その点に、60年安保以後に本格的に日本に流入された議論としての、日本近代化論の論争的な側面が表れている。

金原左門は、日本近代化論と60年安保との関係について、次のように述べている。

「近代化」論が日本にひとつの体系として登場してきたのは、あの一九六〇年の安保改定反対国民運動の後であった。[中略]「近代化」論は、当時、国民諸階層の世論を無視し、議会制民主主義のルールすらふみにじった安保改定の強行採決後の社会状況に接木するかのごとくおとずれた所得倍増計画・高度経済成長ブームの状況を背景に、まさに、「日本近代化」論として日本の歴史的課題と現実の問題をトータルに結びつけようとしていただけに、投げかけた波紋は大きかった。⁽¹¹⁾

このように金原は、当時の政府によって進められた経済成長路線の理論的支えになったものとして日本近代化論を位置づけている。さらに、ここまで取り上げてきた日本近代化論の提唱者のひとりであるライシャワーは、〴〵知日派、の〴〵学者大使、として、1961年から66年まで「六〇年安保騒動で動揺した日米関係を修復する」役割を担って駐日大使を務めていた⁽¹²⁾。そのライシャワーが、新聞雑誌などを通して、日本の資本主義的發展を強調する議論を広く展開していたことを踏まえれば、池田勇人内閣のもとで国民所得倍増計画が推進され、60年安保の政治的混乱が清算されようとしたことと、日本近代化論の流行は軌を一にしていたと言える。

さらに、日本近代化論は、日本政府によって高められた1968年の「明治百年」を祝賀する気運とも重なり合う。1966年4月15日に「明治百年記念準備会議」の設置が閣議決定され、その第1回会議において、「明治百年」を明治改元から100年後の1968年10月23日とすることが決まる。そして当の68年10月23日に、日本政府主催の明治百年記念式典が日本武

(11) 金原左門『「日本近代化」論の歴史像——その批判的検討への視点』（中央大学出版部、1968年6月、1～2頁）。

(12) 道家真平『「明治百年祭」と「近代化論」』（清水光明編『【アジア遊学185】「近世化」論と日本「東アジア」の捉え方をめぐって』勉誠出版、2015年6月、113頁）。本論文では、日本近代化論に関し、文献の所在など、この道家論文から多くを学んでいる。

道館で行なわれた⁽¹³⁾。

遠山茂樹は1968年の段階で、「明治百年」記念と「近代化論」の「日本近代史観」は「不思議なほど似かよっている」と指摘している⁽¹⁴⁾。遠山が挙げる両者の「共通点」には、「明治維新から今日までを、一本の等質なものとして把握する」こと、「帝国主義の認識が弱い」こと、「人民の役割を過小に評価する」ことなどがある⁽¹⁵⁾。この認識は、次節で検討する大江による「明治百年」批判に見られる歴史観にも通ずる。

政府が提示した「明治百年」記念の主旨には、「先進諸国の文明を吸収しこれらの諸国を追うことで足りたわが国は、いまや、発展途上にある隣邦友邦諸国から指導と援助を求められる立場にもなっている」⁽¹⁶⁾と謳われている。「明治百年」記念は、安保闘争以降に明確になってきた、発展・成長を礼賛する政治状況を象徴する祝祭行事として企画された。そしてそれは、「隣邦友邦諸国」との関係性を「発展」に対する「指導と援助」という観点から再形成しようとしている点で、「高度に近代化したただ一つの非西洋国家」として近代日本を評価し、軍国主義をアクシデントとして位置づける日本近代化論とも共振する。

ここまで、ライシャワーらによって展開された日本近代化論を概観し、当時の重要な政治的イベントとして企画されていた「明治百年」記念との接点を確認した。以下では、それらが示す歴史観に対する、大江の反応について検討する。

2、「民衆」への眼差し

『万延元年のフットボール』を書き終えたあと、1968年1月から12月にかけて大江は、全11回の連続講演を行なっている⁽¹⁷⁾。「戦後において確認される明治」と題されたその第1回講演で大江は、「政府の宣伝する「明治百年」を「特殊に方向づけられたまぼろし」としたうえで、「明治百年」記念の動きに対して次のように述べている。

(13) 鈴木洋仁『「元号」と戦後日本』（青土社、2017年9月、195～200頁）。

(14) 遠山茂樹『明治維新と現代』（岩波新書、1968年11月、6頁）。なお、前掲、金原『「日本近代化」論の歴史像』（270～280頁）も、「近代化」論とナショナリズムとの結びつきを捉える観点から、「明治百年」と日本近代化論との関係について論じている。

(15) 前掲、遠山『明治維新と現代』（6～7頁）。

(16) 『歴史学研究』（1967年1月号）に掲載された、「政府の「明治百年」記念行事に関する資料（続）」のうち、「資料4 明治百年を祝う」より引用。

(17) 大江健三郎『核時代の想像力』（新潮選書、1970年7月）としてまとめられた。

民衆のひとりとして自分はそういうまぼろしとはちがうもっと確実な「明治百年」を考えたい。そこでどういう方向づけの「明治百年」をきみは考えているのかと問われるならば、ほくは自分の戦後体験、戦後の新しい憲法のもとでの生活としての戦後体験と重ねあわせられるものとしてのみ「明治百年」を考えているとまず答えたいと思います。その視点からいえば政府がおこなっていることは、戦後を抹消する、戦後をわれわれの意識の上から払い除いてしまう方向づけです。ほとんどいまや、戦後という時代はなかったのだ、したがって悲慘に負けた戦争すらなかったのだという「明治百年」の宣伝がおこなわれていると思います。⁽¹⁸⁾

ここでまず大江は、自身にとっては、「悲慘に負けた戦争」の時代への批判を踏まえた「戦後の新しい憲法」を意識してのみ、「明治百年」は考え得るとする。「悲慘に負けた戦争」に対する意識を重視している点で、この観点は、先に見た日本近代化論への批判にも繋がっていくものとも言える。そのうえで、大江はこの講演で、「明治百年」を、現在を生きる自身と現実的に繋がるイメージとして捉えるために、沖縄に視点を向ける。

「一九六七年秋」に「沖縄に二度目の旅をした」経験をもとに大江が語るのは、「新憲法」に関わる沖縄と「本土」との関係性についてである。「新憲法の外の、外国の基地の沖縄という、すさまじい『民主主義』の——引用者注」マイナスの面を現実的に認識せざるをえない場所として、沖縄がある」一方で、「沖縄の子供たちが、民主主義感覚というほかはないものを確実にもっている」という状況を大江は見取っている⁽¹⁹⁾。特に大江が注目するのは、沖縄の「民衆」が自らの力で「民主主義」を作り出す局面である。

「沖縄の民衆のかちとろうとしているデモクラシーは、憲法によって保障されていない以上、たえず現場で、個人の力の積みかさね」によって守られてきたと大江は述べる。そして大江が注目するのが、その「民衆」の力の裏面に、「明治以来の差別の総体」としての、「われわれ本土

(18) 大江健三郎「戦後において確認される明治」(前掲、大江『核時代の想像力』19～20頁)。

(19) 前掲、大江「戦後において確認される明治」(29頁)。

の人間」による沖縄への「皺寄せ」があるということである⁽²⁰⁾。

「明治維新以後のわれわれの国の発展の背後」で、廃藩置県によって沖縄は「一応日本の領土としてはっきり中国から断ち切れ」、「沖縄独自の中国関係」は「すっかり押しつぶ」されてしまった。そして戦後、「沖縄にある米軍基地は核兵器をもふくめて対中国の基地」であり、「沖縄の民衆」は、「どのようにしても中国にたいして正常な位置をとりかえすことはできはしない」。

われわれ本土の人間はいまや民主主義の条件について沖縄を差別している。新しい憲法はそこに施行していない。しかも核兵器のようにわれわれ本土の人間はなんとかそれからまぬがれているところのものを沖縄に背負わせている。そして中国との関係をもっとも危険なかたちに硬化させる基地たらしめている。まことに戦後の沖縄を考えることは、すなわち明治の沖縄をあわせ考えることにならざるをえないとぼくは思います。⁽²¹⁾

この講演で大江は、「戦後の新しい憲法」のもとにある「本土の人間」としての自身の生活が、こうした沖縄との関係性のもとにあることに目を向ける。さらに、同時に、「沖縄の民衆」が自らの手で「民主主義」を「かちとろう」とする局面に注目し、その、核兵器がそばに置かれた状況で自身の生命について「切実に考えている人たち」とともに、「明治以後の百年間の近代化を考えなおすこと」が⁽²²⁾、「明治百年」を、現在を生きる自身と現実的に繋がる形で捉え返す唯一の方法であると大江は述べる。そのように大江は、沖縄に対する「本土」の権力的関係について思考しながら、近代化の「百年」のあいだに生きた「民衆」の具体的な生きざまに想像力を向ける。その思考によって大江は、政府による「明治百年」記念を批判していくのである。

一方、この講演で沖縄について思考するに際して使用されていた「民衆」という言葉は、大江の著作においては、管見の限り1965年頃から目立って多く使われ始めている。1966年に発表した「様ざまな民衆の虚像」というエッセイのなかで、大江は次のように述べる。

(20) 前掲、大江「戦後において確認される明治」(29～36頁)。

(21) 前掲、大江「戦後において確認される明治」(37～38頁)。

(22) 前掲、大江「戦後において確認される明治」(39頁)。

民衆のイメージ、それはすべての職業人が持っているにちがいないが、それぞれの職業にしたがって、特殊な、民衆のイメージがあるはずである。小説家のもつ民衆のイメージは、巨視的、全体的、総合的なものではない。小説家は微視的、部分的、分析的なイメージをしか、もつことができない。かれは典型的でないある一個人の内部にはいりこむことによって、民衆への展望にいたろうとする。⁽²³⁾

こうした「民衆」を捉えるための方法意識のもと、大江は1965年に初めて沖縄を訪問し、先の講演にあった通り「一九六七年初」に「沖縄に二度目の旅を」する。さらに大江は、1969年から改めて繰り返し沖縄を訪れ、やはり「民衆」という言葉を多用した『沖縄ノート』をまとめる。『沖縄ノート』でも大江は、沖縄に米軍基地を集中させ続けることを選んだ「本土の日本人」として、沖縄に対する「日本」の権力的関係を問い直そうとした。こうした沖縄取材などの実践を通して、権力に抑圧され、またその抑圧に抵抗する「民衆」の姿を「微視的」に「追求」するという、作家としての方法意識が強くされていった。

「明治百年」に際しても大江は、「市民あるいは町人や百姓」が「めざし」た「かれら自身の解放」が「明治維新の民衆的基盤であった」としたうえで、「明治はよかったという声を発し、よかった明治の記憶をもっていると称する人たちが明治の民衆を中心に考えていることは、まず絶対にないといっているように思います」と述べている⁽²⁴⁾。

以上のように、日本近代化論を理論的支えとした「明治百年」記念と比較するなら、大江の視点は、直線的な歴史観のもとに国家の発展・成長を捉えるのではなく、むしろ「民衆」のなかの「一個人」のあり方を掘り下げて「追求」し、それを描き出すことで「民衆」の多様性への想像力を開こうとするものであった。

そうした大江の歴史観は、同時期の小説作品である『万延元年のフットボール』からも読み取ることができる。次節では、特に、物語内で言及される中江兆民『三酔人経綸問答』との関わりに注目しながら、『万延元年のフットボール』における、「明治百年」記念とは異なる「明治」

(23) 大江健三郎「様々な民衆の虚像——佐藤・ジョンソンを支えるもの——」（『エコノミスト』1966年10月25日号）。引用は、前掲、大江『持続する志』（226頁）より。

(24) 前掲、大江「記憶と想像力」。引用は、前掲、大江『持続する志』（24頁）より。

への想像力の提示の仕方について検討する。

3、『万延元年のフットボール』と中江兆民『三酔人経綸問答』

『万延元年のフットボール』では、「万延元年」の「一揆」の指導者であった「曾祖父の弟」の真相をめぐる登場人物間での討議が、物語のひとつの軸を作ることになる。以下では、「曾祖父の弟」の造形に注目することで、『万延元年のフットボール』が「明治」における「民衆」の多様性について考えることへと通路を開いていく局面を提示する。

「万延元年」の「一揆」を指導したあと、「曾祖父の弟」は、物語の終盤で明らかになるように、「仲間たちを背後に見棄てて森を抜け新世界に出発したのではな」(13)⁽²⁵⁾く、実は「地下倉」に「自己幽閉」していた。そのあいだに「曾祖父の弟」は、地上に向けて「五種類」の「手紙」を書いている。ここで注目するのは、2通目の手紙から3通目の手紙までのあいだに、「二十数年の空白がある」(11)ことである。三通目の手紙が書かれたのは「明治二十二年春」であり、その内容は、1889(明治22)年の「憲法発布の報を受けて」、「谷間に住む曾祖父」が「それを喜ぶ手紙を都市の弟に書き送ったのに対する、冷静な批判をこめた」ものであった(11)。また、この手紙が書かれた時期は、中江兆民の『三酔人経綸問答』(1887年／明治20年)が刊行されたすぐ後の時期にあたる。つまり「曾祖父の弟」は、大日本帝国憲法の発布という出来事に刺激され、再び筆を執ったのであり、その際に、手紙に記される「曾祖父の弟」の思考の基底をなしたのが、『三酔人経綸問答』に表れる中江兆民の思想であった。

「曾祖父の弟」はこの手紙で、「発布される憲法がどのような内容のものであるかをまだ知らないうちに、ただ憲法という名のみに酔うのはどういうものだろうか？」(11)という問いを抱えながら、『三酔人経綸問答』から次の箇所を引用する。

《且つ世の所謂民権なる者は、自ら二種有り。英仏の民権は恢復的の民権なり。下より進みて之を取りし者なり。世又一種恩賜的の民権と称す可き者有り。上より恵みて之を与ふる者なり。恢復的の民

(25) 以下、『万延元年のフットボール』の引用は、初刊の単行本（講談社、1967年9月）より行い、それぞれの引用箇所に該当の章番号をゴシック体で付す。

権は下より進取するが故に、其分量の多寡は、我れの随意に定むる所なり。恩賜的の民権は上より恵与するが故に、其分量の多寡は、我れの得て定むる所に非ざるなり。若し恩賜的の民権を得て、^{ただち}直に變じて恢復的の民権と為さんと欲するが如きは、豈事理の序ならん哉。》⁽²⁶⁾ (11)

『三酔人経綸問答』は、「洋学紳士君」、「豪傑君」、「南海先生」の三者による討議形式で進められる。ここで「曾祖父の弟」が引用しているのは、「洋学紳士君」の意見を批判する「南海先生」の言葉である。

「南海先生」の言う「二種」の「民権」のうち、「英仏」の「恢復的の民権」は、「国王宰相たる者威力を恃みて、敢て自由権を其民に還さ」なかったことが「禍乱の基」となり、それによって「英仏の民がその恢復的民権の業」をなしたことにより獲得されたものとされる⁽²⁷⁾。一方で「恩賜的の民権」は、自由民権運動が衰退したあとのこの時期において、1889（明治22）年に発布されることになる欽定憲法（明治憲法）を指すと考えられる。

上記の引用箇所での、「恩賜的の民権」（上から与えられる民権）に不満があるからといって、性急に「恢復的の民権」（下から進んで獲得する民権）に変革しようとすることの論理的飛躍を指摘する「南海先生」の言葉は、直接的には「洋学紳士君」の「進化」論的な発想を批判して述べられたものであった。

「洋学紳士君」は、「嗚呼、民主の制度なる哉、民主の制度なる哉。君^{くん}相^{しょうせんせん} 專擅の制は、愚昧にして、自ら其過を覚らざる者なり。立憲の制は、其過を知りて、僅に其半を改むる者なり。民主の制は、磊々落々として、其胸中、半点の塵汚無き者なり」と述べ、この三つの「制度」を「政事的進化の理」に当てはめて、「民主の制は、正に政事的進化の理に係る

(26) この箇所について、1965年刊行の岩波文庫版に記載された現代語訳は以下の通り。
「それに、ふつう民権とよばれているものにも、二種類あります。イギリスやフランスの民権は、回復の民権です。下からすすんで取ったものです。ところがまた、別に恩賜の民権とでも言うべきものがあります。上から恵み与えられるものです。回復の民権は、下からすすんで取るものであるから、その分量の多少は、こちらが勝手に決めることができる。恩賜の民権は、上から恵み与えられるものだから、その分量の多少は、こちらが勝手に決めることはできません。恩賜の民権をもらって、すぐさまそれを回復の民権に変えようなどと思うのは、論理の飛躍ではありませんまいか。」
(中江兆民『三酔人経綸問答』桑原武夫・島田虔次訳・校注、岩波文庫、1965年3月、98～99頁)

(27) 以下、『三酔人経綸問答』の引用は、前掲の岩波文庫版による。その際、ルビは適宜削除した。

第三步の境界」、つまり最終的局面だと主張する。

「南海先生」による批判は、この「洋学紳士君」の論理に対し、「民主の制」は、「進化」によってではなく、「種子」をひとつひとつ人々に植え付けていくように実現されるものだとする、草の根的な発想からの批判であった。

紳士君、紳士君。思想は種子なり、脳髓^{でんち}は田地なり。君真^{きみしん}に民主思想を喜ぶときは、之を口に挙げ、之を書に筆して、其種子を人々の脳髓^う中に蒔^まゆるに於ては、幾百年の後、^{ほうほうぜん}芄々然として國中^{こくちゅう}に茂生^{もせい}するも、或は知る可^{べか}らざるなり。⁽²⁸⁾

この批判は、ひとつひとつの地道な言論活動を通してこそ「民権」が実現されていくことを、「政事的進化の理」に頼る「洋学紳士君」が看過していることに対する批判に他ならない。「南海先生」の言葉を引用する「曾祖父の弟」の「手紙」は、そのように「洋学紳士君」を批判しつつ「南海先生」によって述べられた、「種子」をまくことによる民主化の思想を「曾祖父の弟」が肯定的に摂取していることを示している。

その「手紙」を読み込んだ「蜜三郎」は、「曾祖父の弟は、発布されようとする憲法の内容が分量の少ない恩賜の民権をあたえるものにすぎないだろうことを予想し、それを憂えて、進取的民権を獲得するための集団があらわれて活動することを切望している」(11)と「手紙」の内容を伝える。

一方で「蜜三郎」は、「谷間」の「住職」から、「明治四年、廃藩置県の令を発端としてこの地方に起った」、「万延元年のそれではない」「もうひとつの一揆」について「記録」した『大窪村農民騒動始末』を渡される(11)。その「小冊子」には、騒動の「指導者」が誰とも知れぬ「不思議千万なる大男」であり、かつ「弁説に富」んでいたことが記されていた(13)。「蜜三郎」は、騒動に参加した「民衆」からひとりの死傷者も出さなかったことを理由に、その「大男の指導力の卓拔さ」を読み取る。そして「蜜三郎」は、その「指導者」が、「突然地上に再現した」

(28) 岩波文庫版記載の現代語訳は以下の通り。

「紳士君、紳士君、思想は種子です、脳髓は畑です。あなたがほんとに民主思想が好きなら、口でしゃべり、本に書いて、その種子を人々の脳髓のなかにまいておきなさい。そうすればなん百年か後には、国じゅうに、さわさわと生え茂るようになるかも知れないのです。」(前掲、中江兆民『三酔人経綸問答』岩波文庫、99頁)

「曾祖父の弟」であったという「啓示」に捉えられる。

そこで僕をとらえている啓示は、顔蒼ざめた猫背の大男とは、倉屋敷の地下に閉じこもって万延元年の一揆を十年間も考えつづけてきた曾祖父の弟の、突然地上に再現した姿だったにちがいないと発展してゆく。十年間をこえる自己批判の日々をつうじてかちえたすべてを投入してかれは、血なまぐさく成果の疑わしかった最初の一揆とはうってかわって、暴動の参加者と傍観者に唯一人の死傷者も出すことなく、しかも攻撃の目標たる大参事を効果的に自殺へと追いつめ、処罰される暴動参加者は無いという成功裡に第二の一揆を推進したのだ。(13)

ここでは、「万延元年の一揆」と比較しながらこの騒動を「第二の一揆」と捉え、その間における「曾祖父の弟」の「自己批判の日々」の成果が、「唯一人の死傷者も出すことなく」、しかも騒動を目標の達成へと導いたことに求められている。「蜜三郎」は、「一揆」が「血なまぐさ」いものから「死傷者」の出ないものへと変化していることをもって、「曾祖父の弟」の「指導力」の上昇と捉えているのだ。そこから、かつての「血なまぐさ」い「一揆」の「指導者」の位置から、漸進主義的に「農民」の権利を獲得する思想へと推移する過程にいる「曾祖父の弟」の姿を窺うことができる。権力に抵抗する「民衆」のあり方について「自己批判」を続けていた「曾祖父の弟」が、平和主義的な「暴動」の解決を図ったことは、のちに『三酔人経綸問答』に触れることで「進取的民権」の「獲得」を「切望」するに至ることと共鳴する。

しかし、ここまで問題にしてきた第3の手紙から「わずか五年後」、すなわちちょうど日清戦争が開始された1894（明治27）年に書かれた「曾祖父の弟」の「最後の二通の手紙」（第4、第5の手紙）は、「かれ」の「民権の側の人々に加担する「志」」が「急速に衰弱してしま」い、「甥」が兵役を逃れるための工作を手伝うべく熱心であり、次いでは、やむなく戦争に参加した甥を心から気づかう内容のものであった（11）。近代日本は、『三酔人経綸問答』のもうひとりの登場人物である「豪傑君」が、「^{くに}邦を大にし、邦を富し、兵を増し、艦を多くするの策」に「速に」「従事」すべきだと主張した通りに、軍国主義の道を進むことになる。「曾祖父の弟」の第4、第5の手紙は、その進み行きに沿う形で書かれ

ている。「曾祖父の弟」は、「南海先生」によって述べられた思想を肯定的に摂取してから「わずか五年後」、「豪傑君」が主張した通りの日本による他国への侵伐行為に身内が巻き込まれ、「急速に衰弱してしまった」のだ。「残された手紙はそれだけであ」り、「それ以後、曾祖父の弟がなお生存していたという手がかりは残されていない」(11)。

「曾祖父の弟」は、「恢復的の民権」を獲得すべく、小さな一地方における「暴動」においてではあれ、確かにその思想に基づいて行動を起こそうとした。しかしその行動はやがて、軍国主義の道を進む日本近代史の流れに飲み込まれてしまう。『万延元年のフットボール』が描き出すのは、その「曾祖父の弟」が、近代史の裏側で「地下倉」にひとり「幽閉」しながら、権力に抵抗する「民衆」のあり方について深く考え続けた思索の痕跡なのだ。そのように、この小説において大江は、近代日本の始まりと向き合う際の想像力を、場所的な関係においても権力関係においても〈周縁〉に置かれた「民衆」が、いかに思考したかということに向けるのである。

おわりに

第2節で検討した講演「戦後において確認される明治」のなかで、大江は、『万延元年のフットボール』で引用したのと同じ『三酔人経綸問答』の一節に言及している。

「恩賜的な民権はだめなのであって、恢復的な民権、自分自身の力でかちとるところの民権をもたなければならない、とする人間がいた」として中江兆民に言及しながら、大江は次のように述べる。

政府の「明治百年」イメージの操り人形になる。われわれがそれを拒みたいなら、自分は明治からの百年の近代化の総体をどのように認識しているかということを示さねばなりません。明治にたいする自分自身の想像力を発揮しなければなりません。⁽²⁹⁾

このように大江は、「明治百年」記念とは異なる「明治」を想像するための歴史意識を作ることと、「恩賜的なデモクラシーを恢復的なデモクラシーに、自分の手でかちとった民主主義につくりかえる」⁽³⁰⁾ ことと

(29) 前掲、大江「戦後において確認される明治」(27頁)。

(30) 前掲、大江「戦後において確認される明治」(39頁)。

の相互関係を示唆する。

その背景のひとつとして、1965年11月の日韓基本条約の強行採決にあたって大江が示していた感想との関わりを考えることができる。大江はそこで、「市民たち」が「いわば、今夜そこでどういうひどいことが行なわれるか？」をあらかじめ知っているがゆえに、国会にそっぽをむくというような状況が訪れていると指摘していた⁽³¹⁾。

のちに大江は、1971年の沖縄返還協定とあわせ、それらの強行採決が、「バンザイの声」という戦前・戦中の絶対的天皇制との繋がりを想起させる叫び声とともに行なわれたことを指摘している。植民地支配への謝罪と戦争によって死傷した人々への補償を欠いたまま結ばれた一九六五年の日韓基本条約、および、苛酷な戦場として国体護持のための「捨て石」にされた地に置かれた米軍基地を、引き続き集中させた状態にすることを決定した1971年の沖縄返還協定。それらが強行採決されるに際して上げられた「バンザイの声」について大江は、「朝鮮と沖縄から耳をすませば」、「日本人全体のたてる叫び声として、直接に戦前、戦中の、日本人が朝鮮、沖縄で喚きたてたバンザイにつらなったであろう」と述べている。「絶対天皇制を先頭にアジアを侵略する方向づけで驕進し、顛覆した近代化」を批判するという「戦後のものの考え方」とは「根本的に逆行する考え方」において上げられたのが、「バンザイの声」であつたと大江は認識する⁽³²⁾。

大江は、そのように行なわれる強行採決に際して、国家の政治と「市民たち」の意識が乖離する状況を問い直そうとするからこそ、「アジアを侵略する方向づけで驕進し、顛覆した」経験を持つ「明治からの百年の近代化」について、「自分自身の想像力を発揮」することを訴えた。ここには、「近代化」を成長・発展の歴史として礼賛する政治的言説に対する批判の実践としての、異なる歴史を構想しようとする意識の発露を見ることができる。

(鹿児島純心女子短期大学専任講師)

(31) 大江健三郎「恐ろしきもの走る——「日韓条約」抜打ち採決の夜」(『週刊朝日』1965年11月26日号)。引用は、前掲、大江『持続する志』(207頁)より。

(32) 大江健三郎「受け身はよくない」(『世界』1972年11月号)。引用は、大江健三郎『言葉によって』(新潮社、1976年5月、15頁)より。

